
災厄の生き様

火憐ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

災厄の生き様

【Nコード】

N5315X

【作者名】

火憐ちゃん

【あらすじ】

災厄の子として生まれた赤ん坊
そんな男の子が徐々にぶち壊れていく（アホの意味で）物語
きっかけは一人の女の子

バトルあり！！笑いは…置いといて、感動…も置いといて
作者の頭が弱いのでそこら辺は無理です

ハチャメチャ魔王な物語第二の

いや、第ゼロの物語！！

ハチャメチャ魔王からの方はこれがどうなったらあなるんだ？と
災厄の生き様からの方はハチャメチャ魔王は一先ず置いておきこい
つがこう爆発するとどうなるのかと楽しんで見てください

はじまり(前書き)

はじまりはじまり

はじめに

それは遠い昔のことである

魔界という魔法の世界

その魔界の一部地域のことである

古よりの言い伝えでその身に災厄を宿すと言われる子がある夫婦の間に授かった

一族全員から

恨み

妬み

全ての負の感情を産まれてすらいない胎児に送り続けた

親である夫妻ですら恨み妬まれ胎児は育つ

本来であれば普通の子供として生まれるはずであったその胎児

人の想いは強すぎた

やがてその胎児は意思を持った

負の感情を受け続けその存在が変質した

そうただの子供として生まれるはずであった胎児が災厄をその身に

宿し、正真正銘の災厄の子として変質した

そしてその胎児は災厄を一手に引き受けて産まれてすぐに殺されるはずであった

しかし、産まれてすぐの赤ん坊一人殺せずにその一族は全員虐殺された

その赤ん坊は産まれて泣くのではなく笑いながら

災厄の子としてその名の通りに1、000を越える一族全員が炎によって殺された

これはそんな災厄の子の物語

最悪で災厄な子供の物語

災厄と化物（前書き）

災厄と化物

二人は出会います

災厄と化物

災厄の子が生まれて5年

少年は元気に育っていた

「あは…あはははは!!」

「ぶち殺してやる!!」

そう元気に殺し合いをしていた

相手は13人の大の大人

有り体に言えば盗賊に位置する者達

しかし殺し合いという表現には語弊があった

盗賊の一人が武器を構えて少年に突撃する前にその首は胴体と分かっていた

首を力で木の実でも摘み取るようにもぎ取った

これで18人目

この盗賊グループは元々30人の大盗賊団であったがただの五歳の子供に手も足もでずにただ虐殺されていた

「あはははは!!殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す!!」

少年は掴んでいた生首を強引に二つに割る

当然卵のように脳が現れ少年はそれを千切り口に入れる

「狂ってやがる…」

ニィ…とその言葉に反応するように狂ったような笑みを浮かべる

「あは…」

《炎舞》

少年の手から炎が吹き出る

災厄の存在として生まれた時から使える炎の魔法

「魔法…使い…!!」

盗賊達に焦りが生まれる

魔法使いは人間としての器に納まらない

超越した存在である

「狼狽えんじやねえ!!」

《アイアンブレス》

一際身体が大きい盗賊

この盗賊団のボスである存在

ボスである彼も魔法使いである

怒号と共に口から鉄の破片が幾重にも現れて少年に襲い掛かる

一つ一つが直撃すれば一撃で五歳の小さな身体を粉々にするであろう大きさ

プレスとして広範囲に拡がり少年に逃げるスペースは無い

「あははは!!」

《炎舞》

笑い声と共に巨大な赤い火柱が少年の目の前に現れる

「な…!!!?!」

ボスの放った鉄の破片は全て火柱に溶けて消える

あまりにも違いすぎる魔法の威力

「逃げるぞ!!こいつただのガキじゃねえ!!災厄だ!!」

「あはははは!!」

火柱の中から狂ったような笑い声

盗賊達は一瞬で恐怖に包まれた

背中を向けて不格好でも無様でも関係なく全力で逃げようとした瞬間

《炎舞》

火柱が崩れ炎の雪崩となって盗賊達に襲い掛かる

「くそがあ！！」

《アイアンブレス》

ボスである盗賊は全魔力を開放

打ち勝たなくとも逃げるために相殺すればいいと考えた一撃

巨大な岩石のような鉄の塊を放つ

巨大な鉄の塊ならば自身の身体も隠せて、炎からも守る壁として最良だったが災厄には通じない

鉄の塊が一瞬で消え去った

相殺なんて自惚れを完全に打ち碎いたと同時に炎が盗賊達全員を包み込んだ

辺りには焼け野原のみが残った

少年を産んでしまった一族は遺跡の守人と呼ばれて盗賊達に恐れられていた

広大な森の中に100を越える遺跡がある

それは過去の魔法使い達が作ったと言われる遺跡

金銀財宝は勿論のこと、魔法の道具や遺産と呼ばれる魔法が使えるようになる道具等が眠っている

しかし少年を産んだ一族はそれを守るために遺跡を囲むように暮らして盗賊達は近づくことができなかった

しかし五年前一人の生き残りすらおらず滅びを迎えた

こぞって盗賊達は遺跡の宝を目指した

そして少年は五年間ずっと餌がやってくるその森に住んでいた

趣味は遺跡攻略

遺跡を攻略して宝を入手することで盗賊達はその宝を入手しようとやってくる

餌が向こうからやって来るのだ

遺跡には幾重もの人為的な罠や自然的な罠があり侵入を拒む

規模と罠と宝によってランクで分けられていて、Sが最高、Cが最低のランクで四つある

見分け方は簡単だ

自然的な畏があればAクラス以上

自然的な畏が無ければBクラス以下

自然的な畏は宝に宿る魔力が漏れでて長い時間をかけて存在が変質したものである

それだけ大きな魔力をもつ宝が眠っている

少年が狙っているのはAクラス以上

理由はお宝が希少価値があるため狙われやすい

少年の首には盗賊達の中で懸賞金がかかけられている

賞金は10億

一生遊んで暮らせる額である

「暇…だ」

殺し尽くすと暇になってしまい少年はその場に倒れるように寝る

これは普通に寝るよりも餌がやってくるためだ

知恵をつけていた

「あら？こんなところに子供がいるわね」

背後

というよりも倒れているので足の先

気配が現れた

「!!!?」

声をかけられるまで気付かなかった少年

反転しながら飛び起きる

「なんだ…お前…?」

少年と対峙しているのも少女だった

黒髪の着物を着た少女

外見は少年より少し歳上の八歳程の少女

「ふふ…私?…私は静紅よ。あなたは?」

「あは!!」

《炎舞》

少年は笑つと静紅に向かって炎の槍を投げつける

「ひえ…!!!?」

《完全領域》

しかし少年が放った槍は静紅の薄透明色の防御壁に防ぎきられた

「あはははは！！」

防ぎきられた

初めて攻撃を止められた

それは少年の中で初めての経験で心の底から笑いが込み上げる

「びびびビックリしたわああ！！？」

しかしその少女はその場に座り込んでいた

腰が抜けたのだ

「私は名前を尋ねてるのだけど…聞く耳持ってくれないし…」

次々と放たれる赤い槍

全ての攻撃を防ぎきる

「あは！！」

狂ったような笑み

「まあ…こんなところに子供がいるってことは災厄で最悪の子供よね…」

「あは!!」

頷くように笑う

「面白いなお前!!」

「会話フェイズ入ったの？」

手を休める少年

キラキラと刺すような殺気が消えていく

「私は静紅、盗賊よ、この近くにあるSランクの遺跡のお宝が欲しいのだけど手伝ってくれないかしら？」

「…もっと殺し合え」

「…」

会話が通じない

言葉は理解しているが我が強すぎるのだ

「それで名前は…？」

「名前？」

会話は繋がったが首をかしげる少年

「名前を持ってないの？呼び名よ、え〜個人を特定する記号みたいな」

「知らん、殺し合え」

「二言目にはそればかり」

溜め息を吐く静紅

「じゃああなたって勝手に呼ぶわ、あなたは災厄の子よね？」

「そう呼ばれる。それが名前がいい」

ときとつである

即決でときとつである

「名前は大事なものよ？もっとよく考えて決めなさい」

笑顔の静紅

（私…お姉さんっぽいわ！！）

盗賊である静紅だが外見が子供であるため、獲物と見られることは多いがお姉さんのように接することができるのはこれが初めてである

「ふうん…そんなもんなのか…」

少年自身も初めての会話

敵意も殺意も感じない会話に戸惑いながらも接する

「そんなもんなのよ…」

微笑む静紅

同時に静紅と少年はある一点を見る

「おい…」

「わかってるわ…」

200メートル先

哀れな餌を発見した

森で視界には捉えていないが気配は感じている

「そういえば…遺跡攻略一緒に手伝ってくれるの?」

「…いい、お前面白い…殺せないし」

会話をしたことがない少年

少したどたどしいがはっきりと肯定した

「いいわ…契約成立ね、相手の数はわかるかしら?」

「殺すぞ…20」

200メートルの範囲

少年にとっては見ているのと同じである

「私があなたに期待してるのは…あなたなら巻き込まれても死なないからよ…死なないでね」

妖艶に微笑む静紅

魔力が解放される

「殺す…か？」

同じように魔力を高める少年

僅かに殺気が放たれる

「あらあら…」

静紅は微笑みながら同じように僅かに殺気を放つ

そして、同時に動き200メートルの距離を一瞬で詰める

『な…!!』

盗賊達にとってはいきなり現れたように見えて

「あはははは…!!」

その瞬間には一人が少年によって真っ二つに身体がちぎられた

「ふふ…」

そして違う一人も上半身が手刀で爆散された

「あは…あはは…あはははは…！」

血を浴びて

身体をちぎった感覚を感じて

声にならない悲鳴を聞いて

絶望した表情を見て

そして気持ちよい程の殺意と敵意を向けられ少年は心の底から楽しくなってくる

笑いが止まらない

「あは…！殺す殺す殺す殺す殺す…！全員殺す…！あはははは…！」

「あらあら…楽しそうね…ふふ」

盗賊達は構えるまでに身体を布のようにちぎられ

身体が爆散し

構えた時には残るは二人だけとなった

「この化物があ…！？」

恐怖で顔を歪ませながら盗賊は叫びながら玉砕覚悟で突撃する

しかし叫んだ言葉

「あは…!!!?」

少年が笑いながら殺そうとした瞬間

背筋が凍った

少年は本能のままに全力で空に跳躍

「ふふ…ふふふ…ふふふふ…今、何て言ったの…」

魔力が爆発したように解放される

同時にそれだけで殺せるような膨大な殺気が放たれる

魔力の解放により二人の盗賊は吹き飛ばされ木に激突

「私は静紅…化物なんかじゃ…ない!!」

力が込められた手刀一線

巨大な衝撃波が放たれて木々と共に盗賊一人を跡形もなく消し飛ばす

「あは…あははははは!!!!」

それを上空から見た少年は笑う

自分よりも強い存在

同じように魔力を全開放

向けられた殺気に静紅は反応

「…あなたも殺すわよ」

冷たい目

そして強大な殺気

災厄として望まれず生まれた少年と
化物として望まれず生まれた少女

似たような境遇に生まれ育った二人の殺し合いは二人が力尽きて倒れるまで続いた

この出会いはこれからの少年にはとても重要で原点であった

災厄と化物（後書き）

名前 無し

種族 災厄の子供

所属 遺跡の盗賊

武器 なし

魔法 炎舞

人の想いによつて災厄となつた少年

眼に入つたものは皆殺し

殺すことが何よりの喜び

ただ常時敵意と殺意を受けていたため、敵意や殺意をもたないものには違和感を感じてしまう

近距離が得意な間合いで引き裂くことやちぎることが大好き

キレルスイッチ 無し

力 A +

器用 A

魔力 S

魔法 A

素早さ A

近距離 A ++

中距離 B

遠距離 B

初めての恐怖（前書き）

盗賊の少女の静紅とSランクの遺跡に向かう少年

そこで待ち受ける恐怖とは…

初めての恐怖

災厄と化物の壮絶な殺し合いから三日間

ずっと気絶していた少年と静紅

誰からも襲われなかったのは奇跡に近いのではなく

襲ってきたが寝ていても充分殺せるレベルしかいなかったためである

幸いにも腕がちぎれることもなく

内臓破裂や複雑骨折程度の怪我ですんでいて、三日寝れば代々身体は動くようになった

災厄と化物としての再生力の賜物である

「ん〜よく寝たわ〜」

大きく伸びをする静紅

「…」

少年は身体を軽く動かし状態を確認する

「ふふ…私の予想通り死ななかつたわね」

微笑みを浮かべる静紅

少年にとっても自分より強い存在は初めてで

静紅にとっても互角に戦える存在は初めてである

静紅の場合は孤独が癒えた

同属を見つけて内心も表情も喜びを隠せない

「殺し合い…殺せなかったのは最初だ」

「最初って言うよりも初めてって言った方が適当よ？」

どうしても少年の話し言葉は盗賊達のを聞いたりして覚えているためおかしい

「まあ…いいわ…それよりも遺跡」

スキップでもしそうな静紅

傷も大体は癒えたため、目的の遺跡に向かう

「逆」

少年はこの遺跡の森で五年間過ごしてきた

遺跡の大体の箇所はわかっている

静紅が向かおうとした方向と目的の遺跡がある方向は真逆であった

「…」

ピタリと足が止まる静紅

「や…や…ね〜試したのよ〜」

歳上のお姉さんとして不甲斐ないところは見せたくない静紅

少しの冷や汗と強がりを言って反転し

「あら…?」

着物の裾を踏んづけた

ぐらりと揺れる静紅

簡単にいえばずっこける静紅

「へぶ!!!?」

そのまま木に頭から激突

鈍い音が響く

若木とはいえ20年は経っているものをただそれだけでへし折る

ゆっくりと倒れる若木

「…」

「…や…ちょっとしか触っていないのに折れるなんて…この木が弱

いのよ!!」

歳上のお姉さんとして威厳が崩れた

もともと少年は感じていなかったが静紅はなんとか誤魔化そうとする

「いやほら…あれよあれ!!こんなところに罠があるとは思ってなかったのよ!!」

罠も何も自分で自分の裾を踏んづけただけである

「ほらあなたもそう思わ…いないわ!!」

少年は静紅が転けても言い訳を連発しても気にせず遺跡へ進んでいた

静紅は急いで追い付こうとする

幸いにも少年は普通に歩いていたのですぐ追い付けた

「先に行くなんてひどぶ!!」

追い付けた途端に凄まじい勢いで転ける

少年にぶつかる勢いだが少年は背後からの足下に目掛けて放たれた突進を少しだけ跳躍して避ける

「…」

進行方向を塞がれた少年は顔面からスライディングして倒れている

静紅を避けて進もうとする

「ふわああん!!もういやああ!!」

起き上がり泣き始めた静紅

しかし少年は無反応

「ちょっとは気にかけてよお!!」

駄々をこねる子供のように静紅は腕を振り回す

「!!!??」

当然ただの子供とは次元が違う静紅のそれは衝撃波となって少年に襲い掛かる

転がるように避ける少年

「殺る気…か?」

臨戦態勢へと移行する少年

「殺る殺らないじゃなくて気にかけてよお!!」

理不尽であった

「…」

少年は臨戦態勢を解く

「お前を気にかける意味が…ある…か？」

理不尽に対して少年がとつた行動は正論である

少年よりも強い実力を持つ静紅が転けてもダメージは無い

何度もアホのようにずっとこけるといふ精神的なダメージはあるが少年には理解ができない

しかし、少年の言い方では

お前程度気にかける存在ではないわ！！このゴミ虫が

と静紅には捉えられた

「ふ…ふわああん！！」

更に精神的なダメージを受けた静紅

そして静紅の思考は

無視されて先に進まれるのは嫌

両足を折って動けないようにしよう

と変わった

泣きながら立ち上がり静紅はゆらゆらと少年に近づく

「!?!?」

今まで感じたことの無い嫌な気配に少年は動物のように身体を屈めて臨戦態勢へと移行する

その構図はまるでライオンVSシマウマであった

シマウマはどちらか

ライオンはどちらかなど聞くまでもない

静紅はゆらゆらと接近

「…」

後退りする少年

初めて恐怖を感じた瞬間であった

「殺す!?!」

しかし謝罪も知らない

恐怖も知らない少年にとっては理解できないものである

《炎舞》

殺らなきゃ殺られる

そのことは理解した

そして再び殺し合いが始まる

「遺跡まで…長そう…だ」

ポツリと感想を洩らす少年

「あら？そつよ遺跡よ…両足を折ったら時間かかっちゃう」

思い出したかのような静紅

少年を包んでいた恐怖が消える

「殺し合い…か？」

少年としても殺し合いは楽しいが目的まで逸れるのは面倒らしくす
ぐに矛を納める

「いえ遺跡に行きましょう」

再び逆方向に歩き出す静紅を放置して少年は遺跡に向かう

遺跡には二種類あり上に進む塔のような遺跡と

下に進む穴のような遺跡である

今回の遺跡は後者の下に進む遺跡であり、森のなかで見つけにくい
遺跡になる

しかし、すでに遺跡の森は庭のようなものである少年は迷うことな
く入口に向かう

深い森の中で方向がわからなくなるのは当然だが、静紅のアホも足
さされて悲惨な状況である

「着いた…ぞ」

「あら…ここがそうなの？」

着いたところは大木であった

静紅は周囲を見渡すが入口のようなものは見つけられない

「上」

少年は大木の上を指差す

「あらあら…」

そこには穴があった

大木の中が入口

言われなければ気付かない

「よく知ってるわね…」

「魔力が強い…だからわかる」

大木が息を吐いているかのように穴から魔力が漏れ出ている

意識しなければ静紅にはわからなかった

少年は少しでも魔力を感知すると向かい、人間なら殺す、他の物なら放置を繰り返していて見つけたものだ

少年は跳躍して器用に穴へと入り込む

「…」

しかし静紅は頭をぶつける予感がした

自分が入ろうとした瞬間に枝が折れ大木に頭をぶつける

そんなイメージができてしまった

「…どうしよう…」

少し考えたのち静紅が行った行動

「…そうだわ」

それは穴を掘げようと手に力を込めることである

手刀の形を作り全力で薙ぐ

1,000年は越えていそうな巨大な樹

静紅の頭をぶつけないからという理由で消し飛ばされた

「ぶぶ…これでよし」

入口の樹が消し飛ばされて底が見えないほどの大きな穴が現れた

「さあ…Sランクの遺跡…楽しめそうだわ〜」

鼻唄混じりに楽しそうに穴に入ろうとして

「あら!?!?」

静紅は再び裾を踏んづけて頭から穴にダイブした

「ひいやあああ!?!?」

絶叫をあげながらSランクの遺跡に突入

「…?」

少年の真上に落下コースだったが気配を感じていた少年は受け止めずに避けた

「へぶ!?!?」

顔面から着地する静紅

しかしダメージはあまりない

少年と静紅がいる場所は岩や土で舗装された穴蔵ではなく木々が茂げ、光も地上のように明るかい場所であった

初めての恐怖（後書き）

名前 静紅

種族 化物の子供

所属 盗賊

武器 なし

魔法 完全領域

人の想いによって化物となった少女

少年と出会うまでは孤独だった

災厄という仲間に来て孤独が癒える

静紅が遺跡の森にいったのは遺跡の宝と災厄の少年に会うためでもある

近距離が得意な間合いで手刀と完全領域による防御壁で攻守共にバランスが良い

キレルスイッチ 化物と言われること

力 A

器用 A+

魔力 S

魔法 S

素早さ A+

近距離 S

中距離 B+

遠距離 B

遺跡攻略（前書き）

遺跡に入った少年と少女

Sランクの遺跡とは…

遺跡攻略

「私って遺跡に入るのは初めてだけど、こんな場所なのね」

少年と静紅は森の下に森があるという不思議なこの遺跡にいた

空のようなものも見えて見渡す限りは森であった

通路のようなものはない

完全に外と同じ雰囲気

少年としてもいつもとは雰囲気が違うことに少し気になったが気にせず先に進む

「まっ…待って」

いそいそと少年を追う静紅

カチ、と何かのスイッチが入る音

「あ…」

もはや何のスイッチかなと言っ必要はないだろう

《炎舞》

草で隠れていたスイッチを静紅が踏むと同時に上空から隕石が降ってきた

大きさは10メートル程

少年はスイッチを踏んだ瞬間に魔法を発動しており、赤い炎の球体を形成

大きさは隕石の大きさの半分程度だが問題なく相殺する

「あらあら……」

「お前…殺す…か？」

初っぱなから畏にかかるといふ足手まといっぶり

少年は軽く殺気を放つ

「わ…わざとじゃないのよ!!…?」

慌てながら静紅は

カチ、と再びスイッチを踏んだ

『…』

責めるような少年の眼

地面から二つの巨大な土の手が現れて二人を潰そうと襲い掛かる

《完全領域》

静紅は魔法を発動

自分と少年を包むように防御壁を展開

防御壁に突撃した土の手は逆に粉碎された

「う…ごめんなさい」

「…っ」

少年は軽い舌打ちをする

「座れ…」

静かな圧力

「はい…」

「お前遺跡初めてだ…だから説明する」

少年としても無駄に魔力を使うのは面倒である

「遺跡…Sランクは三層ある。一層、造ったやつが罫今いる…二層、変質した生き物や自然物…三層、ゴーレム…罫があるのはここだけ…」

一層目はこの遺跡を造った者の趣味趣向による罫である
造った者が強力な魔法使いであればあるほど罫も強力になる

二層目は遺跡に眠る宝の魔力を浴びて存在が変質した生き物や自然

物がいる

奥に眠る宝が貴重なものであればあるほど強力な何かに変質する

三層目はAとSの境目と言われる層

造った者の分身ともいえるゴーレム

Sランクに位置する遺跡の作製者は全員が強力な魔法使い
楽には勝てない

少年としては三層目までは無駄に魔力を使用する気はない

「…わかった…か？」

「わかったわ！！」

名誉挽回と意気込んで立ち上がる静紅

カチ、

もはや汚名挽回であった

「…」

舌の根が乾かぬうちにである

「…わかった…」

何か諦めた少年

静紅の襟首を掴む

「ん？」

大木から手と足が生えて少年と静紅に襲い掛かる

「…死ね」

その大木へと静紅を投げつける

「ふえええ！？」

《完全領域》

投げられながら魔法を発動

勢いと固さで大木を真っ二つに粉碎する

「ななな…なにを」

魔法を解除して空中で態勢を立て直す

その瞬間に少年は再び静紅の襟首を掴む

そして再び投げる

静紅が好きに移動するから面倒なのだと思った少年は静紅を投げて
運ぶ

空中にも罫はあるが少年が投げた軌道には一つも罫がない

簡便の運搬方法だ

もつとも静紅でなければ投げた瞬間に首がもげる危険な方法である
少年としても一層目はつまらないため次へと進みたいと考えていた
森の中で通路もないため目指す場所がわからないというこの遺跡の
一層目の最大の罠

「あゝなんか慣れるとこれ楽ね」

しかし少年は迷いなく進む

この遺跡を発見した時のように魔力の通気孔を探しあてていた

そこへと進むだけである

「はあゝ楽チンね」

慣れた静紅は力を抜いてなすがままに投げられる

「死ね…」

釈然としない少年はそのまま受け止めずに放置

当然ながら重力はあり、落下する

「へび…!」

力を抜いていた静紅はそのまま地面に落ちた

「ふぶ！！？」

ワンバウンド

「ひべ！？」

ツーバウンド

「はぼ！！」

スリーバウンドで勢いが止まる

「…うう…」

生きていることを確認して少年は舌打ちをする

プルプルと落下の衝撃で震えている静紅を無視して少年は下へと続く穴へと落ちる

前に少年は小石を虚空へと投げる

第一層目攻略

カチ、

少年が投げた小石はスイッチを見事に当てて畏を発動させる

残ったのは静紅のみ

つまり静紅に向けて畏が発動

「うう…ひどい目にあつたわ…」

あの後も鎌鼬を避けてスイッチ

その後の罨も避けてスイッチ

そんなこんなで五回ほど罨 & amp ;スイッチを繰り返して10分
後にようやく第二層に降り立った静紅

「…あら…終わり？」

その頃には翼がもぎ取られたドラゴンの腹をを少年が引き裂いていた

最後の一匹

数十はいたドラゴンは腹を引き裂かれて全滅していた

ニタリと狂喜の笑みを浮かべた少年

「さて…次が最後かしら」

第二層目は静紅が入った瞬間に攻略

根も残されていなかった

「…」

少年は再び平常状態に戻り、頷いた

穴は見えるところにあり、すぐに降りることができる

「疲れてない？」

「別に、」

少年が頷いて三層目は二人で降り立つ

そこは50メートル四方の石でできた部屋であった

今までとは別の意味で雰囲気の違い、遺跡のようなイメージである

「…なんか普通ね」

拍子抜けという感じの感想を洩らす静紅

「…宝はそこだ」

部屋の奥に扉があった

第三層であることは間違いなくつまりそこが目的地である

少年が指差すと同時

『!?!?』

少年と静紅に圧力が襲い掛かる

「ようこそ…少年少女、私はここの作製者でありゴーレムだ…」

長身の男が部屋の中央いきなり出現した

圧力が更に強くなる

男は若い風貌ですらりとした長身に外套を羽織っている

見かけはただの優男

しかし外見で姿を判断するのは間違いである

少年と静紅も外見で判断してはならない者である

「待ち遠しかったぞ…私を完全に殺してくれる少年と少女よ」

圧力が更に増す

爽やかな笑顔を向ける男

少年と静紅は一步引いた

一步引いてしまった

正真正銘の戦いの意識をもっている時に、純粹な恐怖を感じて引いてしまった

「さあ殺し合おう、反則級の少年と少女よ…私はアギト…生前は絶対強者級であった、相手にとって不足は無いだろう」

遺跡攻略（後書き）

はい、初見の方は初めまして八チヤメチヤ魔王からの人はお久しぶりです。

反則級とか絶対強者とか意味のわからない単語は次話で説明します
読んでいただきありがとうございます。

絶対強者級（前書き）

遺跡のゴーレムは絶対強者級だった。
いやまず絶対強者級ってなに？

絶対強者級

「絶対強者級…？」

少年はその単語がわからずに首をかしげるが静紅は知っているらしく、その単語を聞いてビクリと震えた

「強さには三段階あるわ…一般級、反則級、絶対強者級。一般級は魔力が扱えないいわば雑魚、反則級は一般級と絶対強者級の中間、絶対強者級は…」

一旦静紅の言葉が途切れる

一度口を閉じて息を吐く

「気まぐれで世界を滅ぼすことができる強さ…」

「…」

静紅の言葉に少年は黙りこむ

「説明の手間が省けたかな？礼を言う」

アギトは爽やかに微笑む

感じる圧力は変わらない

「一旦引きましょ…私達じゃ勝てないわ…」

静紅は8歳にして引き際を心得ていた

生きていれば勝ち

それが静紅の考えであつた

「そうはいかない…殺してほしいんだ」

《地華碎蓮・閉》

アギトは魔法を発動

降りてきた穴が土で塞がれる

逃げ道は完全に無くなった

「…あは…」

ずっと黙っていた少年の口が開く

その笑みは災厄の笑み

狂喜の笑みを浮かべた

全魔力を開放

その総量はアギトより劣る

だが

「あは…あははは！…あははははははは！…」

《炎舞》

少年は笑いながら魔法を構築

炎を腕に宿らせてアギトに接近する

「ちよつと…！！？」

静紅もその行動は予想外であり、反応が遅れる

《地華碎蓮・壁》

少年の炎を纏った拳

アギトに向かって放たれたそれは空気中に出現した土の壁で防がれる

「あははは！…」

防がれたが少年の笑いは止まらない

高く跳躍し壁を乗り越えて再び突っ込む

《地華碎蓮・槍》

アギトは槍を生成し射出

巨大な土の槍が少年に放たれる

「あはは！」

少年は空中で右腕の炎を勢いよく燃え上がらせる

ジェット噴射の要領で少年は一回転

そのまま槍を横殴りにする

軌道を逸らし回避した少年は再びジェット噴射の要領でアギトに急接近

「やるね…逸らしたか」

《地華碎蓮・両手》

アギトは両手を合わす

瞬間、少年の行く手を塞ぐように巨大な土の手が出現

少年の背後にも同じ物が現れて避ける間もなく押し潰す

《完全領域》

「…私を忘れちゃ困るわ」

ぎりぎりの所で静紅が追い付き少年を護るために防御壁を展開

円形の防御壁である静紅の完全領域は全方位関係なく防ぐ

「あははは…！」

「っ!!!?!」

少年が笑うと同時に静紅は完全領域を解除

すぐさま距離を離す

静紅がいた空間に拳が放たれていた

「敵味方関係なしだな…」

その様子を見ていたアギトの感想

だがそれは間違いである

少年にとっては敵味方は無く全てが殺す対象になっているだけである

《炎舞》

少年は槍を生成しアギトに射出

《地華碎蓮・壁》

炎の槍は土の壁によって防がれる

「あははは!!」

「速いな…」

その一瞬でアギトの背後まで移動

目眩ましに放ったため防がれることは予想していた少年

そのまま手刀を放つ

「だが残念」

ひらりと横にずれて回避しお返しにと蹴りを当てる

防ぐこともできずに弾丸のように吹き飛ぶ少年

「!?!?!?」

静紅は少年を受け止めようとするが、殺意のこもった視線を感じてとどまる

少年から目を放しアギトへと向かう

壁に直撃する少年だが、静紅の判断は正しい。あの場で少年を受け止めていたらその少年の手刀で静紅は殺されていた

静紅は両手を手刀の形にしてナイフのようにアギトに斬りかかる

恐ろしく速い静紅の攻撃を全て無駄の無い動きで避けているアギト

「速いね…」

余裕の笑みを浮かべるアギト

「あははは!!! 死ね死ね死ね死ね死ね!!!」

笑い声

《炎舞》

アギトと静紅が少年に意識を向けるとすでに槍が放たれていた

アギトは静紅に腹部に掌底を放ち、地面に叩きつけて後ろに跳躍

「ぐっ!!」

地面に叩きつけられた静紅は避ける術がない

《地華碎蓮・隕石》

《完全領域》

アギトと静紅は同時に魔法を発動

静紅へと追い討ちに土の隕石を放つアギトと少年の槍と隕石を防ぐために防御壁を展開する静紅

「…ま…ず!!」

静紅の完全領域の防御は絶対ではない

炎の槍を防いだが隕石までは防ぐことができずに破壊される

一瞬だけ食い止めたことにより、静紅は逃げる時間ができた

隕石が防御壁を破壊して静紅へと迫る僅かな時間

一瞬ともいえるそのタイムラグ

《完全領域》

静紅は全力で後ろに跳躍して魔法を発動

衝撃波を防ぎきる

「はあ…はあ」

呼吸が乱れる静紅

掌底のダメージはでかい

この戦いで一番静紅が不利であった

アギトは少年と静紅を攻撃する

少年はアギトと静紅を攻撃する

だが静紅はアギトへは攻撃するが少年にはアギトを倒すためにも攻撃はできない

その攻撃対象の差はでかい

もしアギトに攻撃されて吹き飛んだ先が少年の場合は手刀で串刺しにされる

「…」

理性が無い少年と共に戦うには理性が邪魔であった

災厄と共闘できるのは化物だけである

(…嫌なのだけど…仕方ないわね)

静紅は目を閉じる

無理矢理化物である自分を引っ張り出す

目を閉じて、記憶を遡る

化物と呼ばれて蔑まされた記憶まで遡る

生まれる前から化物と呼ばれて、殺意や敵意を受け続け
生まれてきたことで化物と呼ばれて道端に放置され何かある度に石
や刃物を投げつけられ傷つけられ、気持ち悪がれた記憶

静紅は少年と違い一族皆殺しまで3年の月日があった

その忌まわしき三年間を思い出す

理性をとばして化物になるために、普段は言葉一つ言われれば吹き
飛ぶもの

しかし、自分で化物になるためには記憶が必要であった

そして、強い憎悪をもって化物と言った母親の顔を思い出した瞬間

「ふ…ふふ」

強い者との殺しあいを望んでいる災厄と化物は協調性の欠片も見せずに各々が攻撃を放つ

「あははは！！」

炎が少年の身体を包み込み一直線にアギトへと突撃する

炎を纏った体当たり

《地華碎蓮・壁》

アギトは土の壁を少年の体当たりの軌道に構築する

「ふふ…」

その際に静紅が間合いに入った

先程と同じような静紅の手刀を避けるアギト

いや避けたはずであった

「…はや…い!？」

先程よりも遥かに速い手刀を放ちアギトの肩を掠めた

油断ではない、ただ静紅の最大速だと記憶してしまったアギトは予想よりも速い静紅の手刀をかわしきれなかったのである

仕切り直しに一度静紅から距離をとろうとするアギトの背後

「あははは！！」

土の壁が壊れた

少年が力ずくで破壊したのだ

「っ！！？」

「あはははははは！！ちぎれるお！！」

少年からすれば壁を壊したら獲物が自分に接近していたのだ

身体を包んでいた炎を右腕に集中し拳を握りしめて放つ

《地華碎蓮・杭》

地面から土の杭が飛び出て少年の右腕の骨を砕く

軌道を剃らすことに成功して、アギトは少年が防御ができない右腕の方向から蹴りを放つ

「あははは！！」

しかし、少年は折れた右腕で無理矢理蹴りを防ぐ

「な！！？」

少年自体は蹴りで吹き飛ばしたが、本来なら確実に首が吹き飛ばさずであった

そして蹴りの隙

「ふふ…ねえ…早く血を魅せて」

妖艶に微笑む静紅がアギトの左腕を掴んだ

そしてそのまま左腕は切り落とされる

「ぐっ!!」

製作者の亡霊でゴーレムの役割をもつアギトは静紅の望み通りに血
はでない

「ふふふ…まだ出ないの？」

(…まずい!!)

静紅の笑みに嫌な気配を感じ取ったアギト

《地華碎蓮・浮上》

土が静紅の足下に出現し爆発的に増殖する

「…が!!」

頭から天井に叩きつけられそのまま土が静紅を押し潰す

(一人…!!)

そして残るは少年のみ

左腕は無くなったがそれでも少年を驚異とは感じない

(君はただの猪突猛進だ…そして攻撃力が足りない)

少年の右腕自体はアギトと同じで完全に使えない

条件は同じ

《炎舞》

《地華碎蓮・連槍》

アギトは地面から無数の土の槍を放つ

一本一本が5メートル程の巨大な槍

50メートル四方の空間を埋め尽くし避け道が無い

1〜2本までなら少年でも相殺できるが後は原形を止めずに貫かれるだけである

「あははは!!もつと強く!!」

そして少年は赤色の槍

ではなく緑色の炎の槍を生成

量より質を表すかのように巨大な槍を放った

(…まずい!!)

緑色の炎の槍

見かけ倒しではない

感じ取れる魔力の量の桁が違った

(…進化した…この短期間で!!?)

魔法は進化する

本人が望むままに、より強力になる

だが生まれて五年の少年が戦いの最中に進化させた

本来であれば一生をかけて進化するかしないかといった次元である

アギトですら20年はかかったのである

常識が打ち破られ驚愕しそして動揺となって隙を作る

少年の槍は無数の土の槍を全て相殺した

「あははは!!」

槍を放つと同時に突っ込んでいた少年

その手には緑色の剣が握られている

「…ちっ！！？」

アギトは少年と距離を離そうと後ろに跳躍する

魔法が進化していても猪突猛進は変わらず距離を離して魔法を浴びせ続けねばすぐに倒せると判断した

「ふふ…惜しかったわね」

《完全領域》

「なっ！！？」

跳躍したアギトは完全領域内

防御壁に自分からぶつかりに行く

少年の槍

それは土に拘束されていた静紅を開放していた

圧力により一瞬だけ気絶していた静紅は正気に戻っていた

「あははは！！！」

そして少年も完全領域内

笑いながら純粹に楽しそうに嬉しそうに笑いながらアギトを切り裂いた

「ぐっ!!」

少年の一撃はアギトの両足を切り裂いた

「あははは!!燃える消える死ね殺す!!壊す砕く灰になれ!!灰も残らず塵になれ!!塵も残さず焼失しろお!!あははは!!」

少年の炎の剣に込めていた魔力が更に増大

《完全領域》

「…予言通りか…」

静紅は一度魔法を解除して再発動

自分だけを守るように発動

巨大すぎる火柱が50メートル四方の災厄と化物と絶対強者級の戦いでも壊れなかった壁を粉碎、二層目、一層目を突き破り空高くまで昇る

当然ながらアギトの姿は塵も残していない

「あははははは…は…」

そして魔力を使い果たした少年は笑いながら気絶する

「…あらあら…」

彼は今魂だけでこの場にいる

必要な事が終わるまでは消えることはできない

「…」

少女はずっと無言

その瞳は少年にだけ注がれている

「まあいいか…それでこの少年が次の魔王でいいんだね？」

「…」

こくりと僅かに頷く少女

「それで面倒な手続きは全部やってくれるんだよね？」

「…」

再びこくりと僅かに頷く少女

「良かった…やっと死ねるよ」

本当に嬉しそうに微笑みながら消えるアギト

「…お疲れ」

最後の最後に少女は口を開いた

「…神ってのはわからないね…」

その言葉を聞いて最後の最後に苦笑に変わった

残った少女

やはり少年から視線を外さない

「…魔王…大変…頑張る…ひ…お前…死ぬ…やだ」

ぽつりぽつりと少女は単語を紡ぐ

何かを言いかけたが我慢していた

「…」

少女は屈んで少年の頭を不器用に撫でる

少年は気絶しながらも反射的に手刀を繰り出すがまるでわかっていたように手を引っ込めて回避する

「…270年…会う…楽しみ」

少女は少しだけ微笑みながら翼を羽ばたかせて浮上する

「…」

しかしすぐに、再び降り立つ

懐から一冊の本を静紅の近くに置いてその上に紙を置く

今度こそ役目が終わったのか満足そうに帰っていった

本のタイトルは『魔王の説明書』

置かれた紙には『その子に読んであげて』と記載されていた

災厄の少年の運命が大きく変わった日であった

絶対強者級（後書き）

名前 アギト
種族 ゴレム
所属 魔界の魔王
武器 なし
魔法 地華碎蓮

生前は絶対強者級で魔王だった青年

しかし、食中毒で他界した

魔王を誰かに引き継いでもらわなければ成仏できなかったため、遺跡でまだかまだかと待っていたが、神の少女によって成仏できる日を教えてもらってからは大爆睡していた

中距離が得意な間合いで土の壁と槍で敵の動きを制限しながら戦うのが得意

キレルスイッチ 死因となったキノコ

力 S (SSS)
器用 S + (SSS)
魔力 SS (SSS)
魔法 SS (SSS+)
素早さ S (S+)
近距離 S (S+)
中距離 S + (SSS+)
遠距離 S (SSS)

() 内は生前時のステータス

別れ（前書き）

さて魔王とは何か？の説明です

別れ

「うん…」

二日後

静紅は目を覚ました

一度伸びをして辺りを見渡す

「あの子はまだ寝てるのね…」

身体の調子を確認しあまり問題がないことを確認する

「なにかしら？」

そこでようやく本を発見する

「あの子に読んであげて…え〜と、魔王の説明書」

少年が寝ていて暇だった静紅は本を開く

「ふん」

一度読み終えて本を閉じる

(この子にとっては重石にはならなそうね…)

少年はまだ起きる気配は無くもう一度読み始める

「…」

二度目を読み終えた静紅

ようやく少年が起き上がる

「おはよー身体は大丈夫？」

片腕の骨が粉碎された少年

だが、一度両手を握り開く

「…問題ない」

「そう…良かったわ…それで知ってほしいことがあるのだけど…いいかしら？」

「知ってほしいこと？」

聞く気はあるようで、静紅は本を見せる

「そう…魔王について」

「…文字は読めない」

少年ら会話を聞く環境にはあったが、文字を読む環境にはいなかった

必然的に文字を読む機会はなく、喋ることはまだできるが文字を読むことはできない

(だから…読んであげて…書いてあったのかしら…)

読めないことも確かに理由の一つに入るがそれ以上に少年は本を読まない

これを手に取ったのが静紅でなく少年の場合は確実に燃やしていた

「じゃあ簡潔に話すと…あなたは魔王と呼ばれる簡単にいえば魔法使いの王になったみたいね…それでその魔王の仕事は世界を守ること…それ以外は無いみたい、魔王を辞める方法は一つで魔王という称号をかけて戦いに負けること…はい、何か質問はあるかしら？」

他にもゴチャゴチャ何か書いてあったが不要だと判断して静紅は切り捨てた

知っておくべきだろうことを静紅は少年に教える

「…魔王になった…理由がわからない」

「…多分だけどあのアギトが魔王だったのだと思うわ…それであるが殺したからそれでだと思っただけだ」

静紅の予想は当たっていた

「…世界を守ること？」

守るといふ言葉は少年にとって一番縁の無い言葉である

自分の命ですら守ろうと思っただことすらない

「…何かこの世界の危険があつたらわかるみたいよ。まあ多分だけと相手が絶対強者級で気まぐれで世界を滅ぼそうとしたらわかるのだと思うわ」

それも合っていた

世界が滅ぶ理由は絶対強者級の気まぐれで世界を滅ぼそうとした時ぐらいである

「あいつみたいに強いやつと殺し合える…か？」

「そうみたいよ…」

「なら…なんでもいい」

災厄と呼ばれようとガキと呼ばれようと全く気にしない少年にとつて殺せるならばなんでもいい

今までは宝で獲物を釣っていたがそれに魔王という称号が追加されただけである

「それじゃあ、これ渡すわね。読めるようになったら読むと良いわ」

《炎舞》

「ちょ…!!!？」

渡した瞬間に少年の手から炎が本を包み込んで燃やした

「荷物はいらない」

所詮荷物である

少年は動きやすいように荷物は持たない主義である

今まで遺跡攻略して得た宝は全て放置して一番魔力が高くて貴重そうな小型の物だけを盗った

しかしそれも餌が釣れたら捨てるを繰り返していた

「…あなた、ちょっとそこで座ってて」

「…?」

盗賊として静紅はそれを許容するわけにはいかない

静紅は少年を観察し着物の袖から黒い布を取り出し座る

そして裁縫道具を取り出した

30分後

「はい、できた!!着てみて」

静紅は物が完成すると少年に渡す

《炎舞》

そして渡した瞬間に本と同じように燃やす

「…燃えない？」

本と違うのはその物が燃えなかったことだ

「ふふ」結構レアな布でね、色々な攻撃に耐性があるのよ…広げてみて？」

黒い布切れ

少年の考えていた印象はただ一つで広げてもそれがフード付きのコートであつても変わらない

「まずね…突つ込まなかつたけど…格好が汚いからそれに着替えて」

少年の格好は盗賊から剥ぎ取ったボロボロのズボンに布切れとしか言えないシャツにこれまた布切れとしか言えない外套である

今回のアギトとの戦いで更にボロボロになっていた

言うが早いか静紅は外套とシャツを剥ぎ取る

「…うん、手持ちであつたかしら…？」

少年は何の抵抗もしない

実際にもはや邪魔だったからである

またてきとつに餌から巻き上げようと考えていた

静紅は着物の裾に手を突っ込んでガサゴソと何かを探している

五分後

「できたわ！！」

黒いズボンに白い袖がないシャツに黒いコートを着た少年が発見された

「うん！！これでよし！！とりあえず、そのコート以外はただの服だけどそのコートは役に立つわよ！！まずそこらの鎧より軽くて丈夫、身体に合わせて大きくなるし、何より内ポケットにはポケットのサイズ内なら何でも入るし、荷物にもならないわ！！」

目付きが物凄い悪いがそれを除けば普通の少年の格好に見える

「…もらっ」

黒いコートを見ている少年

今まで宝の持ち運びがダルくて一つしか持たなかったがこれさえあれば宝を無尽蔵に入れることができる

つまり餌が多い分獲物の食い付きが多い

断る理由などはなかった

「さて…それじゃ宝の山分けをしましょ？」

最初の目的へと戻る静紅

「わかった」

二人は宝が格納されているであろう扉を開く

『…』

開いたが二人とも言葉は発しない

宝が無かったわけでも貴重なものばかりで声が出せないのではない
魔力のこもった貴重なものや金銭的な価値がある宝石でその部屋は
埋め尽くされているが

静紅は一つの宝のみ盗りたいだけで他には目もくれず
少年はとりあえず片っ端からコートポケットに詰めるだけである

「あつたわ〜！！」

目的の物を見つけた静紅

目がキラキラと輝いてとびきりの笑顔を見せる

静紅が手にしているものはナイフであった

だがただのナイフではなく、歪な形をしたナイフであった

そのナイフは絶対強者級であり、一流の鍛冶職人であるデスパラと
いう男が作成したナイフ

デスパラはナイフしか造らない。また、そのナイフは奇妙な形をしていながらも切れ味は海をも切り裂くとまで言われて いる

デスパラシリーズとも呼ばれている

静紅がそれを狙っていた理由として格好いいからである

嬉しそうに年相応の子供のようにはしゃぐ

少年はそんな静紅を完全に無視してポケットにどんどん詰め込んでいく

「…」

少年が掴んだのは一本の刀

黒く黒いどこまでも黒い刀であった

鞘も鏢も握りも刀身も全てが黒い刀

《炎舞》

とりあえず燃やすことにした少年

普通の刀であれば焼失するはずだが変形もしていない

「…」

少しだけ気に入った少年は脱がされた服を無事な部分だけ引き裂いて刀を背中にくくりつけるための紐にする

そして再び宝をポケットに詰め込む作業を再開する

その間静紅は地面を転げ回りながら喜んでいる

「…」

再び少年の手が止まる

その手にはピンがあった

中には白い光の球体がゆらゆらと揺れている

躊躇いなくピンを握り潰して割る

すると光の球体はゆらゆらと揺れながら消えていった

「…わからないな」

割ったら封印されていた凄い強い何かが見れると考えていたがそんなことはなく、一体なんだったのか理解できないまま少年は次の宝をポケットに入れていく

ようやくポケットの口に入りきる全ての宝を収納した少年の表情は満足気である

「これからどうするの?」

「これから?」

「私はもうここに用は無いから次の宝を探しにこの森をでるのだけど…一緒に行きましょ？」

静紅の目的はあくまでもデスパラシリーズである

もう遺跡の森には無い

盗賊としてつるむのは好きではないが、それはつるんだ者が死ぬからであり少年ならばその心配もない

そして何より面白かったのだ

「…行かない」

「ええ!!?」

しかし、少年の返答はNO

理由としてはここには獲物が来るからである

世界を知らない

国を知らない

街を知らない

そんな世間知らずの少年にとってこの場所は良い狩場であり、遺跡もあり退屈はしない

「そう…残念…じゃあ契約はこれで終わりね」

静紅はデスパラシリーズを集めたい盗賊である

少年にも少年なりの目的があつてとどまると解釈した

理由を知れば狩場ならもつとあることを教えることができたのだから静紅は色々と生まれた場所なので事情があるのだろうと考えてすぐに諦める

本当に残念そうな静紅

「じゃあまたね」

「またね？」

別れの挨拶を知らない少年

少年が知っている別れの挨拶は死ねである

「再び会いましょうって意味」

静紅の笑みは少しだけ悲しそうな笑みであった

「…そうか…再び会うかはわからないが、またね」

またねと言われたのでその言葉通りに記憶した少年

違和感に笑ってしまう静紅

「ふふ…絶対また会うわよ…だって私とあなたは似てるもの…次会うときまでには名前を決めておいてね」

「わかった」

災厄と化物の共闘

一週間にも満たない時間だが、それぞれにとって価値のある出逢いだった

静紅は手を振って跳躍して消えていった

出逢いは唐突で別れも味気ないことだった

「…」

そして少年はそのまま今まで攻略した遺跡へと戻り宝をポケットへと入れた

別れ（後書き）

静紅と別れた少年

静紅から黒いコートをもらった少年はとりあえず片っ端から宝を集めます。

少年にとってかなり便利な物でこれから活用していきます

ようやく序章が終わります。

これまでの話は少年がどんな人物か？を理解していただくための話です。

ここからが本編です

きっかけの始まり(前書き)

ちょっと短いかもです

ようやく本編が始まりました

きっかけの始まり

静紅と別れてから一週間後

少年はSランクの遺跡を攻略して宝をコートにしまって、遺跡を出て発見した盗賊を皆殺しにしてから寝る

といういつも通りの生活をおくっていた

静紅と会ってから変わったことといえば刀を使用するようになったことと、殺す前に名前を聞くことである

そんな少しだけいつもと違うがいつも通りの生活をしていた

少年は朝起きて血と悲鳴を欲してふらふらと森を歩いていた時のことである

「…なんだ？」

空気が変わった

威圧的な空気はどこか懐かしく感じる空気である

光が少年の前に現れる

初めは小さな白い光

それが光量を増していき大きくなっていく

そして少年と同じ大きさまで光が大きくなり人の形に変化していく

一際光が強くなるとそこには一人の少女がいた

「初めまして！！私は椿、あなたの名前は？」

普通ではない登場だが椿と名乗った少女は満面の笑みを浮かべた

「…」

少年は黙って刀を抜く

「ええ！！？…ちよつと待って待って！！」

すると突然慌てる椿

当然の反応といえば当然の反応である

「…」

少年は刀を抜いただけ

椿を観察する

攻撃の意思を見せたが敵意も殺意も発さない

魔力も体つきもそこの盗賊にも劣るレベル

少年と同じくらいの背丈に歳、茶髪でアホ毛が目立つ可愛い少女

民族衣装のような服を着ている

「え〜と名前は?」

攻撃されないと判断して再び口を開く

「…」

静紅と会う前なら、問答無用で切り刻んでいた少年だがそんな気は起こらなかった

「…まだない。お前…なんだ?」

誰ではなくなに

少年は目の前の存在に問いかける

「私は椿だよ?」

少年の問いかけに名前でも答える椿

「あなたは?」

そして再び名前を訊ねられる

「…まだない」

ただの少女

静紅のように強いわけでも

盗賊のように敵なわけでもない。ただの少女

少年にとっては初めて会った存在

触れたら簡単に殺せる存在だがそんな気は起きない

「…ごめんなさい」

少年のその言葉に何やら事情を勝手に推測したのか、目を伏せる

「…まだない。すぐに見つける」

不思議な現れ方をしたただの少女に興味が湧いた少年

「見つける？」

少年の言っていることが何一つ理解できていない椿

「…あは！！」

少女の問いに笑いで答えて手を上げる

《炎舞》

雨のように大量の矢が頭上から降り注ぐが少年の手から発せられた炎が全て燃やしつくす

「さすがは、災厄といったところか…」

森から姿を現したのは青年であった

手には弓を持っているがその青年一人しか気配がない

少年の炎で消されたが無数の矢を一人で放ったということである

「キミ、私はどうすればいいかな？」

「…知るか」

木の後ろに隠れている椿

本人は隠れているつもりだが実際のところそんなものに意味はない

それは椿も感じていたのか少年に対応を聞くが冷たく一蹴された

「キサマが持っている魔剣を渡してもらおうか？」

「魔剣…？」

少年の背中を指差す青年

そこにあるのは黒く黒いどこまでも黒い刀

「魔剣っていうのか…お前の名前は？」

少年は青年に訊ねた

「俺か？俺はアルトだ」

アルトは弓を構える

「アルト…ねえ」

少年は何かを考えるようにぶつぶつとアルトの名前を呟く

《弓まき矢や矢や・追尾矢》

魔法を発動する

光の矢が弦にかかり発射

放ったと同時に十数に分裂した

アルトは遺産持ちである

自身の力では魔法を構築できない者は遺産と呼ばれる魔法が使用することができ物を使用して強力な魔法を苦勞することなく魔法が使える

アルトの所持している遺産は弓である

弓に魔力を込めることでその魔力を媒介に弓が魔法を構築する

アルトが放ったのは数ある種類の矢の一つどこまでも相手を追尾する矢

「…いないか」

一つ頷いた少年

姿が消えて追尾の矢が消える

「なっ!!!?」

弓が真つ二つに切断されていたことに気付いた時には少年はアルトの背後にいた

「くっ!!!?」

振り向こうとした

「あは!!!遅い!!!」

その瞬間には身体は二つに切り裂かれていた

圧倒的な速度の差

「...弱い」

静紅やアギトと戦った少年はどこか満足できていない

血を見ると面白い

肉を切り裂くと笑いが込み上げる

悲鳴を聞けば楽しくなる

それは変わることがなかったがどこか満足ができなくなっている

血が沸きだつことが無くなったという表現が一番正しい

楽しいが物足りない

それは少年にとっての大きすぎる変化

「…まだ名前無い」

「…まだって…キミもしかして人の名前から盗るつもりなの!？」

椿の問いに頷いた少年

思考としては簡単である

名前を決めよう

よくわからない

誰かの名前を盗る

そいつを殺す

自分の名前になる

少年は今名前を盗るために手当たり次第に聞いているがどれもパツとしない

「駄目だよ!!名前は自分で決めるもんだよ!!!？」

「知るか…お前がつけるよ、気に入らなかつたら却下する」

「ええ!!!？」

ひどくてきとじつであった

「じゃあジョンー!」

「却下」

「桜!」

「却下」

「紅!」

「却下」

「レスラ!」

「却下」

「陽炎!」

「…却下」

「どつすねばいいのよ!?!」

次々に却下された椿

怒りの飛び蹴りを放つ

「…」

軽々と受け止める少年

「だから、考え中だ…」

「あ〜う〜!! もう寝る!! おやすみなさい!!」

怒りの発散場所が効かずに発散できなかった椿

諦めてその場に寝転がる

「…」

椿が何だかよくわからない少年

しょうがないので、同じように寝る

こんなファーストコンタクト

出逢いがあり戦いがあり、少し変わった災厄であり魔王の少年と不思議な現れ方をしたただの少女の椿

世界を変える二人の出逢いはそんなくならない会話でコンタクトをしていた

きっかけの始まり（後書き）

椿と少年の出逢いです

ここからが

個人的には面白くなってきます

名前（前書き）

今回少年が名前を入手します

名前

少年が椿という少女と出会い共に行動してすでに一週間の月日がたっていた

「ねえキミ」

「なんだ？」

ときとくに森を歩き獲物を発見するまで歩く

いまだに名前が無い少年のことを椿はキミと呼び、少年もそれで認識している

「疲れたよー」

椿はただの少女だ

少年と同じペースで森を歩くのは辛すぎる

「…」

その場に止まる少年

別に目的があるわけでもなく、盗賊を見つけるために歩いているのだから急ぐ必要は無い

「ありがとう！ー！ー」

「…たく」

あまりの体力の無さに溜め息を吐く少年

椿は疲労が溜まっていたのかすぐに眠る

「なんで俺こいつを殺さないんだろう…」

自分でもわからない心の変化

なぶって殺す

それが今までの自分であった

視界に入るものは全て殺した

しかし、その時の気持ちの高ぶりはない

(何故だろう…)

自分でも疑問に感じてしまう

椿には殺す気が起こらない

歩くのは遅いし

腹は空かすし

喋りかけてくるし

少年にとっては不利益しか生まない

なのに行動を共にしている

少年が行動を共にしたのは静紅と椿だけである

静紅は面白く、自分よりも強い

遺跡の攻略には好奇心が湧いたので行動を共にした

椿は、本気を出さずとも触れないで殺すことができる弱い存在

(…わからんな)

少年は気づかない

いや、気付けない

理解ができない

少年はそんな環境で育たなかった

「あは!!」

気配を察知する

鋭敏すぎる感覚が少年の常時展開している察知網半径200メートルまで接近した盗賊達に気付いた

数は20

少年は魔力を解放

獲物に向かって跳躍した

魔剣を抜いて接近

「あはははは！！獲物だ！！」

少年の存在に気づく前に10人

半数が細切れになる

血飛沫が雨のように降り注ぐ

「あははは！！」

口を開いて血を口に含む

「災厄のガキだ！！野郎共！！」

少年は盗賊達にとっては恐怖の対象である

出会ったら必ず死ぬ

災厄から逃れるため遺跡を諦める盗賊も少なくない

災厄の存在を知りながらも遺跡の森にやってくる盗賊は二種類いる

ただのガキだと思っている盗賊

災厄に対しての対抗策を考えている盗賊

その二種類だけである

どっちにしる結果は変わらないがこの盗賊達は後者であった

ナイフや剣を持つものは固まって構える

弓を持つものはその後ろで構える

そして先頭に立つのは刀を抜刀せずに居合いの構えで構える盗賊団の団長である

「行くぞ!!」

再び一声

少年は何をするのか気になり待ちの態勢に入る

次の瞬間には盗賊団の団長を残して四方八方に散開する

（波状攻撃…？）

遊びを覚えた少年はただ待つ

抜いた刀を回して相手の出方をうかがっている

しかし気配は200メートルから出ていく

「？」

「ああ…理由がわからないってか！？簡単だ…お前に挑むと全員死

ぬ、なら部下を守るために一人残るのがボスの努めだろうかあ!!」

一瞬で少年の懐に接近

キラリと鞘から刀身が光るとすでに抜刀は完了していた

高速の一撃

「っ!!」

少年はそれをバックステップで回避する

団長はすでに再び居合いの構えになっている

抜いてから納めるまでの時間が短い

「お前…名前は？」

「飛影だ…」

盗賊団の団長が少年の問いに答える

「飛影…飛影か…」

ぶつぶつと何度も復唱しながら考えていた

その間も飛影の猛攻は続くが少年に軽く受け流されている

「あはは!! 気に入った!! けどその前に…」

《炎舞》

少年は笑みを浮かべながら火の玉を9つ構築する

そして察知網を一キロ程まで拡大する

「無駄な努力…だな」

少年の感覚で九人の逃げた盗賊の気配が知覚した

「ガキイ!!!?」

少年が何をするのかがわかってしまった飛影

攻撃を止めさせるために攻撃を放つが

パキン、と小気味良い音が響いた

刀が折れた音である

少年がやったことは抜刀のタイミングに合わせて刀を振っただけである

それだけで飛影の刀は折れる

「なっ!!!?」

驚愕の表情を浮かべる飛影だが、そんな暇はあつてはならなかった

「あは!!!」

炎が全てバラバラの方向に射出される

九つの炎が向かう先は飛影が逃がした仲間達

巨大な炎柱が九つ空に昇る

結果など想像するまでもない

「このガキイイ!!」

飛影は全力で握った拳を少年に放つ

身長差は少年の三倍

体格も体重も圧倒的に勝っている飛影の拳

「あはは!! 殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す!!」

少年と飛影の拳同士のぶつかり合い

砕けたのは飛影の拳であった

いや、拳だけでなく肩まで弾け飛ぶ

「ぐ…あ!!!??」

「つまらなかった…ぞ!!」

《炎舞》

無数の赤い炎の球体が飛影を取り囲む

「死ね…」

少年が拳を握る

それを合図に炎の球体が飛影の身体を貫いていく

一つ一つは小さな球体

なぶるように飛影の身体に小さな穴を作っていく、球体は決して貫通せずに飛影の体内に残る

「名前が決まったから…派手に殺してやる」

握りしめた拳を開いていく

「あはは…!!」

呼応するように体内の球体が大きくなっていき

「弾ける…!!」

炎が爆発する

周囲の木々が吹き飛ばされていく

「あはははははは…!!…!!…!!」

半径150メートル

爆心地のように燃えつくされた中心で少年は笑う

欲しいものが手に入ったような子供のように笑う

「死ぬかと思つたわあ!!」

そんな災厄の少年の後頭部にドロップキックをぶちかます椿

「お前には当たらないようにしたぞ」

後ろに眼があるようにドロップキックをかわす少年

ドロップキックを外して地面にダイビングする椿

「ほら…」

少年が指差すのは無傷のライン

扇状に広がる無攻撃地帯

「キミ…常識で考えてよ」

確かに安全だが、その地帯以外は燃えて吹き飛び死ぬかと思うのにも無理はない

「おお…お前!…俺にもできたぞ!」

「何が!!?しかもお前じゃないもん!!」

あまりにもマイペースな少年

椿はまだ名前で呼ばれたことがない

おい

お前

この二種類である

「名前だ」

ニヤリと笑う少年

その笑顔は初めて見せる普通の笑みであった

(そんな風に笑うんだ!?)

「じゃなくて…なんて名前!?’」

意外な笑みに戸惑ってしまった椿

とりあえず本題である

あれだけ自分の意見を却下されて結局どんな名前にしたのかがかなり興味をそそられる

「飛影」

少年は今しがた手に入れた名前を名乗る

「飛影…？…凄い！！マトモだ！？」

突拍子もない名前になったかと冷や冷やしていた椿

まともな名前に驚愕する

(てっきり、ゴルザバボスガイエンバサケノフとか格好いいけど変な名前にすると思ってたのに…)

椿は自身の思考がかなりおかしいことに気付くことはない

「馬鹿にされた気がした…ぞ？」

「そんなことないよ」

あははと苦笑いする椿

「オホン！！」

一度可愛らしい咳払いをする

「もう一回自己紹介するね！！私は椿！！あなたの名前は？」

何事も形からという言葉がある

椿は満面の笑顔で二度目の自己紹介を行う

「飛影」

少年も名乗る

無愛想に名乗っただけだが、椿ははちきれんばかりの笑顔になる

「これからよろしくね！！飛影くん！！」

名前

初めて呼ばれた名前

災厄なんて呼び名でもなく、個人を呼ぶ少年自身の名前

それが喻え殺して奪ったものでも、その飛影という名は今少年のものだ

「…ん」

どこか痒い

照れを隠すかのように軽く頷く飛影

それは今まででありえないことで飛影は自身がどんどん変化していくことに気付いていない

気付けても何故？がわからない

その言葉を知らない

それを一度も受けたことがないからだ

生まれる前から今まで殺意、敵意、恨みと負の感情をその身に受け

続けていた
し

静紅は冗談レベルの殺気しか無く、何より存在が近かった

だから戸惑ってしまい、一緒に行動した

椿は負の感情は何もない

あるのは好意だけ

それは少年が生まれてから初めて受けるものである

家族や友達

それは飛影にとって無いものでそれは欲しかったが飛影は絶対に気
付かないもの

孤独を癒す親しいものである

だから飛影は椿と無意識のうちに行動している

(何だろうか…この感覚は)

飛影が気付くのはそう遠くない未来である

名前（後書き）

孤独だった少年

椿が何故飛影に好意（友達とか家族に対する）があるのか
惨殺する飛影に何故ひかないのか

それは後々です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5315x/>

災厄の生き様

2011年10月26日09時02分発行